



この人を たずねて

福岡教育大学教育学研究科（教職大学院）教授

小泉令三氏

インタビュー
小松佐穂子



Profile — こいづみ れいぞう

小・中学校教諭として勤務後、広島大学大学院教育学研究科博士課程前期修了。福岡教育大学助手、講師、助教授を経て現職。専門は教育心理学、学校心理学。主な著訳書は『子どもの人間関係能力を育てるSEL-8S』（1巻：単著、2～3巻：共著、ミネルヴァ書房）、『社会性と感情の教育』（編訳、北大路書房）、『地域と手を結ぶ学校』（単著、ナカニシヤ出版）など。

■ 小泉先生へのインタビュー

——先生のこれまでの研究について教えてください。

小・中学生の子どもたちを対象に研究を行ってきました。まず、進学や転校といった環境の変化に、子どもたちが適応していく際の問題について取り組んできました。近頃では「中1ギャップ」という言葉があり、小学校から中学校に進む過程で、不登校が急激に増えるという問題が全国的にクローズアップされていますが、研究を始めた80年代頃はそういう言葉はありませんでした。しかしその当時から、小学校から中学校という環境の変化に適応できない子どもたちがいることに注意を払う必要があるのではないかと考えていて、論文にも書きました。

——小学校から中学校への環境変化の適応をテーマとされたのは？

もともとの関心が「子どもの学校適応」にありました。その中で、個々の子どもへのカウンセリング研究をするということも考えたの

ですが、もう少し全般的に子どもたちの適応状況について見たい、考えたいという思いがありまして、「子どもの環境移行時の適応」というテーマを選びました。

——他にどのようなテーマに取り組まれましたか？

子どもたちの学習場面での動機づけ、つまりやる気についてですが、「動機づけに関わる子どもの自己評価」をテーマとしました。子どもたちが自分自身をどう見ているのか、自分の能力をどう自己評価しているのかについての研究です。

それから、「教師の教職能力」というテーマにも取り組んでいますが、これは今現在の職に就いてから始めました。所属が小・中学校などの教員養成を目的とする大学ですから、このテーマについてはプロジェクトを組み、その一員として研究を行いました。小・中学校などでは約20年前から、教員として初めて採用された年に行う「初任者研修」が制度化されていました、初任者指導担当の先生

によって、初任者に対しての指導が行われます。そういう制度が始まりましたので、初任者がこれからやっていけるかどうかという自己評価であったり、研修の有効性、また、指導教員と初任者の認識の違いなどについて研究を行いました。

——先生が心理学を学ばれたきっかけは？ また、研究者をめざされたきっかけは？

子どもの学校適応を援助したいと思っていたときに、心理学に出会いました。教員をしばらく務めた後に進学した大学院のコースで、教育学や社会学的なアプローチもありましたが、その中で偶然、心理学を選択しました。しかし、学んでいくうちにだんだんと心理学がおもしろくなって、今に至っています。

研究者をめざしたのは、教員としての教育実践も楽しかったのですが、一つのテーマにじっくり取り組んでいくことに興味を感じたからです。

——小・中学校をフィールドとして研究を行う際、どのようなことに心配りされていますか？

今、小・中学校でSELプログラム（Social and Emotional Learning：社会性と情動の学習）という、子どもたちの対人関係能力を育成する授業プログラムを実践しています。この場合、学校のカリキュラムの中に、プログラムをどのように位置づけて実施してもらうのか、また実施したことが子どもたちにとってどのような意味合いをもつのかをよく考える必要があります。こちらにとっては何回かの実践の中の一回でも、子どもたちにとってはその学年で経験するたった一回のことです。ですから、実践や研究を行った際には、必ず子どもたちの個別の結果を先生方に返却し、今後の児童・生徒理解



の参考にしてもらうようにしていまして、学校には喜んでいただいている。小・中学校で研究などをを行う場合には、教育活動の中での意味づけを十分に考える必要があるでしょう。最近は、今はやりの言葉で表現するなら「コラボ」という形で、学校側にとっても研究する側にとってもメリットがあるようにやっていくこうという方向に向かっているように感じます。研究内容が実践に役立ち新しい視点を提供できるのだということが学校の先生方にちゃんと伝われば、こちらの研究を理解し、評価してもらえると思います。

——最後に、心理学を学ぶ方にメッセージをお願いします。

基礎的研究から入る人、応用的な側面から入る人のそれぞれが、自分の関わり方を大切にしていくことが大事だと考えます。

■インタビュアーの自己紹介

インタビューを終えて

インタビューの中にもありましたように、小泉先生は今、福岡の小・中学校でSELプログラムの実践をされています。私自身はこれまでに2、3回ほど、小学生に調査をさせていただいたことがあります、そこで感じたことは、小学校という文脈の中で研究をすることの難しさでした。

当然といえば当然なのですが、まず、自分が当たり前のように使っていた言葉は通用しませんでした（どんなに簡単な表現にしても）。子どもたちに、調査方法をちゃんとわかつてもらえるようにと、一生懸命考え尽くして説明を準備したものの、後から考えれば「ああ、そう解釈するのも無理ないなあ」と思うこともありました（そういう意味で、子どもというのは本当に素直です）。

また、教員の先生方にもちゃんと

とご理解いただくことの大しさを感じました。自分が調査をさせていただいたときは、一緒についてくださった担任の先生がベテランの方で、調査中、私の不足を「さりげなく」フォローしてくださいり、子どもたちの手前もあって万能のふりをしながら、心の中では「先生、ありがとうございます!!」と言いました。調査自体は、担任の先生のおかげで無事終了しましたが、今思い出すと、あらゆる面における自分の視野の狭さに、情けなくなってしまうような調査経験でした。

小泉先生は、SELプログラムの実践にもう何年も取り組まれているそうです。そして今では、実践に協力する小・中学校が福岡を中心に年々、増えてきています。おそらくこれは、先生の続けてきた取り組みが、他の小・中学校にも理解され、着実に地域に根付いていることの表れだと思います。

インタビューの中で先生がおっしゃられました「いかにして研究を教育活動の中に意味づけるのか」というお言葉は、とても重要な言葉に感じられました。このスタンスが、協力校の増加に影響していると私は考えます。そしてこの言葉は、私にとっては「いかにして研究を“人々の日常生活”の中に意味づけるのか」という言葉に聞こえました。大学内で研究を行っていると、未熟者の私はついに、その研究内で自己完結してしまいがちなのですが、自分の研究が世の中の人々の生活を豊かに

できるものなのかということを常に忘れてはいけない、と改めて気づかされました。2011年3月の大震災を経験して、日本全土をあげて復興に取り組まなければならぬ今だから、さらに強くそう思うのかもしれません。

心理学とともに

私も、小泉先生と同じように心理学とは偶然の出会いで、私にとってこの出会いは本当にありがとうございました。今、PD研究員ですが、学生の頃から今までの十数年間、心理学を中心に経験してきたことは学問的なことだけでなく、私がこれから生きていくうえでも貴重な財産となっています。

私の研究テーマはずっと「顔、表情」ですが、この出会いも偶然でした。顔は相手がどんな人物か、また表情は相手がどんな気持ちかという、対人コミュニケーションで重要な情報を提供してくれます。このおもしろさに気づいたとき、「顔、表情」と出会えたことにとても感謝しました（そのときはすでに、博士後期課程も半分以上、終わっていましたが）。今は、対人コミュニケーションの上手・下手に関わる、情動性知能（自分や相手の感情の認知、表出、コントロールなどに関わる能力、心の知能指数）という新たなテーマに取り組んでいます。

研究者としてはまだまだよちよち歩きのひよこ同然ですが、これからも心理学とともに、精一杯人生を歩んで行きたいと思います！ 楽しみながら！



Profile — こまつ さほこ

2002年、九州大学文学部卒業。2009年、九州大学大学院人間環境学府博士後期課程修了。博士（心理学）。同年より九州大学大学院医学研究院非常勤研究員を経て、2010年より九州大学大学院人間環境学府学術研究員。専門は実験心理学、認知心理学。論文は「表情認知と人物認知間の非対称的干渉」（共著、認知心理学研究第6巻収載）など。